# 「正信偈」について（第九回）

正信偈の教え上　古田和弘、正信偈のこころ限りなきいのちの詩　戸次公正、等による

譬如日光覆雲霧　たとえば、日光の雲霧に覆われども、
（ひにょにっこうふううんむ）

雲霧之下明無闇　雲霧の下、明らかにして闇きことなきがごとし。
（うんむしげ　みょうむあん）

獲信見敬大慶喜　信を獲れば見て敬い大きに慶喜せん
（ぎゃくしんけんきょうだいきょうき）

即横超截五悪趣　すなわち横に五悪趣を超截す
（そくおうちょうぜつごあくしゅ）

［意訳］

たとえば、日光が雲や霧に覆われたとしても、雲や霧の下は、明るくて闇でないようなものである。信心を得た人を見て敬って、大いに喜ぶならば、ただちに、横跳びに五種の迷いを超えることになる。

前回は、「阿弥陀仏の大慈悲心の光は、いつも、私どもを摂め取って、救おうとして、私どもを照らし、護っていてくださっているので、その光によって、私どもの心の闇はすでに破り尽くされているのです。にもかかわらず、わたしどもの心には、貪りや憎しみなどの煩悩が、雲や霧のように立ち込めてきて、それが阿弥陀仏から振り向けられた、他力の「真実信心」を覆ってしまっている」と、お話しました。

それに続いて、「**たとえば**、日光の雲霧に覆われども、雲霧の下、明らかにして闇きことなきがごとし。」と詠われています。日光が雲

や霧に覆われてしまっているため、私どもには日光を見ることはできません。けれども日光は輝き続けているわけですから、その雲や霧の下は、決して暗闇ではなく、私どものところに明るさは届いているのです。太陽そのものが隠れた夜の暗闇とは、全く異なっているのです。

しかし、その様な本願を信ずるということは、私が自分で心に決めて信ずるのではない、自分で自分の心に決めることは、「自力のはからい」でしかない、と言われます。私がどれほど誠実に、熱心に信ずるとしても、それは本願を信ずるというよりも、私の都合を信じているに過ぎないのです。まことの信は頂くものだと教えられています。

その様な私を何としても救ってやりたいという願いが現にはたらいているということと、その事実にふと気づかされ、しみじみと納得させられること、それが「信を獲る」ということではないでしょうか。

あくまでも誤魔化しでしかない私自身の実態と、そのような私だからこそ、願いが差し向けられているという事実に、心の底から頷（うなず）かされれば、何かが見えてきて、何かを敬う心が私に起こるのだと。

この様に、愚かな自分の姿に改めて気づかされ、本願を敬う身になるならば、それはこの上なく大きな喜び「大いに慶喜せん」と言われる。

また、弥陀の本願を敬い、その本願を喜べる身になるならば、私どもは、たちまちにして苦悩の状態・様々な迷いの状態（五悪趣）を横っ飛びに超えていける・断ち切れる、と言われます。

釈尊の教えの基本では、「五悪趣」は、五道ともいい、地獄・餓鬼・畜生・（阿修羅）・人・天の五趣をいい、阿修羅を加えて、六趣とか六道ともいい、いずれも、我々が現在の生涯において、入れ替わり立ち替わり、次々と経験しなければならない苦悩の状態を教えたものです。

念仏を心から喜ぶならば、たちどころに、一切の迷い、一切の悩みから解き放たれるということです。念仏を喜ぶことが、そのまま、悩みの解決であるということです。逆にいうと、悩みが解決しないのは、念仏を喜べないからだということになります。

合掌